

物語の本義 (一)

一 物語とは何か

物語とは何か、問うてみたい。

いまさらながら——ではあり、さほどむずかしい問題ではない、とは、とりあえず思うことにしよう。

『竹取』『伊勢』『うつほ』『源氏』『狭衣』……。いくらでも実例はあるではないか。それらを通して、これまで多くの研究者、学者たち、評論家たちがさんざん論じてきたことではないか。それゆえ、「物語とは何か」を問うこと自体は、斯界に居住するひとたちは誰でも通り過ぎてきた道でもあるのだ。だからこそ「いまさらながら」なのである。

稿者がこれまで「物語」なるものを考えるに際して刺激

を受けた、おもな著述につきのような一群の書がある。

柳田國男『物語と語り物』（角川書店、一九四六年

一〇月刊）

三谷栄一『物語文学史論』（有精堂、一九五二年五月刊）

阿部秋生『源氏物語研究序説（上・下）』（東京大学出版会、一九五九年四月刊）

版会、一九五九年四月刊）

玉上琢弥『物語文学』（塙書房、一九六〇年七月刊）

三谷栄一『物語史の研究』（有精堂、一九六七年七月刊）

阿部俊子『歌物語とその周辺』（風間書房、一九六九年三月刊）

年三月刊）

野口元大『古代物語の構造』（有精堂、一九六九年五月刊）

月刊）

藤井貞和『源氏物語の始原と現在』（三一書房、一九

七二年四月刊)

角川源義『語り物文芸の発生』(東京堂出版、一九七五年一〇月刊)

益田勝実『秘儀の島——日本の神話的想像力』(筑摩書房、一九七六年八月刊)

稲賀敬二『源氏物語前後』(和泉書院、一九八〇年八月刊)

同『文学誕生——日本的教養の研究 奈良・平安篇——古代・

王朝人の知的生活と物語生産システム』(PHP研究所、一九八三年三月刊)

鈴木一雄『物語文学を歩く』(有精堂、一九八九年三月刊)

稲賀敬二『源氏物語の研究——物語流通機構論』(笠間書院、一九九三年七月刊)

片桐洋一『源氏物語以前』(笠間書院、二〇〇一年一〇月刊)

不要ではあるが、あえてコメントを付しておけば、ここには個人の単著しかあげていない。また物故したのちに編集された論集——たとえば、池田亀鑑選集『物語文学』I・II(至文堂、一九六八—一九八九年刊)、稲賀敬二コレクション『物語流通機構論の構想』(笠間書院、二〇〇七年五月刊)——の類は除いている。二〇〇〇年前後以降の

著も、まだ時間の経過という風雪に耐えていないということをお口に省いている。ただし、さほど厳密な選択ではなく、かならずしもその著者の代表作ともいえない書名も並んでいるであろうし、まだまだ漏らした書もあまたあるだろう。稿者個人の研究歴、研究方法と嗜好によるバイアスがかかりかかっているための偏頗と諒解されたい。しかしともあれ、ここに列記した著作の大半は、研究史に何らかの地歩を占めた「名著」と呼ばれてよいもののはずである。「名著」とは、比較的古い著書であつてもいまだにその名が引抄されるところを見れば、虚名でも皮肉でも何でもない。それらの成果のうえに現在の研究状況があると思えば、「名著」の名にふさわしいものだろう。

それでは、「物語とは何か」の問いは、すでに解決されたのだろうか。

答えは、残念ながら、否、である。

『竹取』『伊勢』『うつほ』『源氏』『狭衣』……、個別に粗密はあれど、研究の永年の蓄積が確実にひとつひとつの作品の研究に精度を加えてはいる。さはさりながら、それらを包括する「物語」とは一体何なのか、稿者を納得させるものがない。第一、個別の作品をとおしてではあるが、物語そのものを論述しようとする論者が陸続として絶えないところを見れば、先の問いに対しては、いまだに研究者

たちひとしなみに納得させる答えが用意されているのではないらしい。

二 「傷痕の多い作品」

「物語とは何か」という問い自体が大雑把で厳密さを欠くのかも知れない。

——「作品のことではない。「物語」そのもの、あるいはそれをつくりあげる構造を問うているのだ」という表現の方が業界らしい、とはいえなくもないが、それだけがこの「問い」の全てではないからこそ、稿者を納得させるものがなくて困惑させているのだ。その生感、あるいは実体とでもいふべきだろうか。

ことの次第を申し上げよう。

最近、別のところ（以下「前稿」^①という）で言及したことなのだが、そこで引用した際にも心に澱のようにひっかかっているながら、当面の文脈のなかに絡められずに通り過ぎてしまったことでもあり、すっきりしないまま、ずっと持ち越している問題がある。

具体的に、その問題の箇所を引いてみよう。かの、阿部秋生博士の名著『源氏物語研究序説』の「結語」の一部である。

……書きながら、伸びてゆく作家の数は決して多いわけではない。その数少ない作家の一人に、この源氏物語の作者を数へてみていいのであらうと思ふ。

書きながら伸びてゆくだけに、その作品には、生々しく傷痕が遺ることがある。しかし、さうした傷痕があるから下らない作品だときめてしまふ必要はないだらうと思ふ。その傷痕が、どういふ意味のものであるかによつて、傷痕のあることが、その作品を重からしめることもあるであらう。傷痕があるならば、その傷痕の意味を検討することも、文学史研究の一つの仕事なのであらうと思ふ。

とにかく、源氏物語は、完璧な作品でないといふこと、傷痕の多い作品であることは認めなければならぬ。少なくとも、日本文学史にとつては、無視できない貴重な傷痕らしいといふことも否定できない。^②……

「傷痕」という表現が適正か否かは論者によつて意見はあろうが、何らかの不整合、不一致、不審といった疑点をひと言であらわすならば、阿部のいう「傷痕」がわかりやすい。

阿部は、『源氏物語』の特に明石の君を中心とする物語を精密に読み解いたうえで、「この物語の構造関係で分か

つて来たことの中の主な事項」として、まっさきに、

この物語を書くことを計画した時、作者の頭にあつたものは、古代伝承物語以来の数々の物語が踏襲して用ゐてゐる伝統的な型であつて、さうした伝統的な物語を否定し、絶縁したところから始めたわけではなく、その伝統的な型の中で物語を組立てはじめたらしい。

(一〇二三頁)

という物語の「構造」(narrative structure)をとりあげた後、それが「第一部三十三帖の中の桐壺十七帖」の骨格部をなすこと、「雨夜の品定め」に端を発する「帚木十六帖」は「内部構造を異にしてゐる別系統の物語」であること、とここでは成立論とは正面から向き合つた議論はしないけれども、桐壺十七帖の物語と帚木十六帖の物語が併存する構造を再確認する。そのうえで、第一部の後の第二部は「構造を異にしてゐる別個の系列の話」であり、「第一部と第二部との間に切れ目をおいて考へる三部構成説」もまた再認識してしかるべきだという。

そうした大きな構造型のなかで、成立論議でさかんに論じられたところの、

帚木十六帖の物語の中の事件の展開は、桐壺十六帖の物語の中の事件——源氏が准太上天皇になるまでの運命の進展とはさうした意味での停滞性を有つている。

(九八四頁)

帚木十六帖の主要人物で、桐壺十六帖において積極的な活動をしてゐる人物は少い。殊に、女主人公にいたつては、姿を全く現さない。

(九八七頁)

といった——今となつてはなつかしい、あるいは人によっては、古色蒼然に見えるであろう——話題が顔を出す。いまさらの回顧ではあるが、第二次世界大戦を挟んだ昭和一〇—二〇年代の『源氏物語』研究の中心課題 (top.) が成立論であつた。同一作品でありながらも前後の間で大小さまざまな齟齬・背馳すること、撞着・矛盾することがあらためてほじくり出され、それらがほとんど『源氏物語』諸巻・物語の成立順序にかかわりあるものとされたのである。

光源氏一八歳の春に出会つた「十ばかり」の紫の君が、若菜下の巻で源氏四七歳の折に紫の上「ことしは三十七にぞなり給。みたてまつり給し年月のことなどもあはれに」(若菜下、一一六三頁)⁽³⁾と、いつの間にか二人の差が拡がっ

てしまふ、——紫上の年齢の問題。

六条御息所の「十六にてこ宮にまいり給て、廿にてをく
れたてまつり給。卅にてぞ、けふまたこのへをみ給ける」
(賢木、三四〇頁) という経歴から算出される前春宮の生
前の期間が、朱雀院の春宮時代と重複し、桐壺帝の在位中
に二人の春宮が並存してしまうことになる、——六条御息
所の経歴にまつわる問題。

竹河の巻で左大臣に昇進したはずの夕霧が、その後の諸
巻では右大臣でいつづけるといふ事実をふくめ、語彙・文
体・構成などの違和から、紫式部自作説・他作説が入り乱
れる状態がつづいている。

また、成立論と直接切り結ぶわけではないが、不整合と
みられる例も数多く報告されている。

いわゆる第二部における登場当初はほぼ同年齢とおぼし
き薫と匂宮が、浮舟の巻では「かのきみ(薫も匂宮と)も
おなじほどにて、いまふたつみつまさるけぢめにや、すこ
しねびまされるけしきよしい(気色・用意)など」(一八八九
—一八九〇頁)と二、三歳の差がつけられてしまふ、——
薫と匂宮の年齢の問題。

八の宮が娘たちを教育するのに、「ひめぎみ(大君)に
びは(琵琶)、わかぎみ(中の君)にさう(箏)の御こと」
(二五一頁)と橋姫の巻冒頭にあったはずなのに、その

数丁のちには、何のことわりもなしに、「いますこしをも
りかによしづきたり」という姉とおぼしき人物が箏の琴、
妹とおぼしき人物が「びは(琵琶)をまへにをきて、ばち
(桴)をてまざぐり」(橋姫、一五二二頁) しているという、
——大君・中の君の楽器持ち替え問題。大局を見渡してみ
たとしても、細部に目を凝らしてみても、とにかく大小の
疑点はいくつも挙げるができる。それが『源氏物語』
という作品の現実なのだ。そうした状況を、阿部秋生は「傷
痕」と称した。また別に「破綻」ともいう。

われわれは、この物語に対する古来の評価——いひ
方はさまざまであるが、傑作であるといふ評価のため
に、どうかすると、この作品を完璧な作品であると認
めなければならぬやうに思ひこみがちである。しかし、
以上のやうな破綻——一貫性を缺いたものを有つてゐ
ることは否定できない。われわれは、傑作であるかど
うかを見定める前に、この物語の現実の形態や性格や
構造を把握すべきであらう。又さうした一貫性を缺如
した作品が、どうして出て来るのかを検討すべきなの
であらう。

『研究序説』一〇二八頁

いまとなつては、こうした指摘もしくは提言は、建前上

はごくあたりまえということになってゐるはず、である。右は主に『源氏物語』に限つた議論のごとくではあるが、「古代伝承物語以来の型を踏まへてゐることが甚だはつきりしてゐるところがあることは、この物語を写実物語だといつて済ませることを峻拒してゐるやうである」(同一〇二七頁)という地平に立つた議論であることを忘れてはならない。これまたあたりまえすぎることはあるが、あえて言うならば、『源氏物語』もまた古代後期という時期の物語であり、現代小説のような読み方を暗黙の了解、もしくは前提とすることに懐疑的でなければならぬはずだ、ということなのである。

ところが、この、あたりまえすぎるはずのことが、実は、現代人たる研究者たちにとつて、どうやらあたりまえではないらしい。阿部秋生が右のように述べたのが一九五九年。時代はあたらしいものを欲しており、阿部のような意見は無視され、一見切り口の鮮やかな清新な意見を歓迎して、それが現在でも定説化してゐる事実がある。これについては、あとで詳しく述べよう。

ともかく、そののちも、間歇泉のように、物語の読み方に再考を求める意見が吹き出すことがあつた。

たとえば、右にその一端をしるした、数々の齟齬・背馳・撞着・矛盾などの「傷痕」「破綻」を並べてゆくと、年齢

の問題の類が少なくないことに気づかされる。物語中、登場人物の年齢が明記されることはさまで多くはないが、物語の構成を読み解く貴重な証拠であり、それらは「年立」のなかに組み込まれてきた。特に『源氏物語』のような長篇を読もうとする際、年立は長い時間の経過と物語の展開を整序してくれる、とても便利な道具なのである。平井仁子は、物語中の年齢を明記する箇所や「としかへりぬ」「としもくれぬ」など年次の推移を示す表現を指標として、その前後を分析した結果を、

……物語の年齢記載を歪めず、またその年齢の数字を年齢記載のない巻へ及ぼすことをせずに物語を読んでいく限りにおいて、「源氏物語」の全体をとおしての年立は成立不可能という結果になってしまう。もっと正確にいえば、物語年の同じ記号でまとめた巻々のグループの中でだけ年立は可能だ、ということになる。しかも、その場合の年立というものは、年齢が示されている年の部分は源氏何歳、と決定できるが、そうでない部分は源氏何歳の時、などという判定は無理なのである。／＼

我々が物語に対する時、物語にはじめから付随したものと年立があつたわけではないことを再認識

し、作られた年立の枠に従って物語の本文を訂正しつつ読むような姿勢は避けるべきではないか、と思うのである。⁽⁵⁾

と述べた。「年立の枠に従って物語の本文を訂正しつつ読むような姿勢」——つまり、片々たる表現をつなぎ合わせて創作した年立に本文を整合させようとする姿勢は、物語の読み方たりえない、物語とは時間の表現を整理させて読むようにはできていない、というのである。

くどいけれども、ここで確認しておくならば、物語とは「一貫性を缺く」ことがままあり、それは「破綻」とか「傷痕」とか呼びうるものであったが、そう称すること自体が、現代に生きている我々の考え方、感性なのであり、作品を読み解いて作りあげたはずの「年立」に「整理させて本文を訂正しつつ読む」といった整合性を求めるようには、物語はできていない、ということなのである。現代小説を読むように物語を読んで読めない、と言いかえて差し支えなからう。しかも、右の議論は『源氏物語』をめぐるものでしかないが、ほかの物語——たとえば『うつほ物語』などでも同様な事情がありはしないだろうか。

ひるがえって、『源氏物語』の話題を蒸しかえすならば、阿部秋生のさきの発言の直前に、次のような言い方もされ

ていたことを、ついでに触れておかねばならないと思う。

この物語は、我々が予想してゐたやうな、完全無缺な作品ではないらしい。短篇物語の集積にすぎないともいひきれないし、単純に理想小説だ、写実小説だ、女性評論の書だ、「もののあはれ」を見せるものだ、と割り切ることもできない。長篇物語と一応いつてみるにしても、短篇物語的にかなり孤立してゐる巻々が介在してみたりもするし、長篇物語としては、何度か基本的構造が變つてしまつて、一貫した主題を通して書いたものでもなささうだといふことも認めなければならぬ。
〔『研究序説』一〇二七頁〕

「完全無缺な作品ではない」「何度か基本的構造が變つてしまつて」いる、「一貫した主題を通して書いたものでもなささうだ」——と、このように『源氏物語』を俯瞰するのであれば、近代現代の小説の世界であつたら、とうに指弾されているはずである。それを傑作だ、名作だ、という評価はいつたいどこに由来するのだろうか。

とすれば、問題は回帰して、ふたたび問わねばならない。
——物語とは、いつたい何なのか。

物語とは何かという疑問形で、物語というものの実体がど

のようなものであるのかと問う時、それが古代の「文学」形態のひとつであるとの前提条件を踏まえたいうえで、それが現代人であるわれわれに理解可能なものなのか、という問いも発せられることになるはずである。

三 「うつつほの中に」「交野の少将」がある

『うつつほ物語』は、『源氏物語』よりもさらに「物語とは何なのか」という問いにふさわしい形態をなすことは、前近代から論じられてきたことらしい。特定の作者による制作というよりも、「形成」と呼んだ方がなじみやすい成立過程を有していることは、すでに『源氏物語』の成立論と並行する時期に論じられていた。

たとえば小西甚一が、俊蔭の巻のうち早くに成立して古層をなすのが「古宇津保」、あたらしく執筆されてそのなかに象嵌された新層を「今宇津保」と称し、ふたつの「宇津保」が糊と鉄で合成されて現状をなしている、と説いたのが一九五四年、昭和二十九年のことだった。

小西は、「いはく」「思ふやう」という言いおこしに對して「いふ」「思ふ」と結ぶ再叙法、同語反復、対句など漢語的表現が「古宇津保」と見なす箇所が多く、「ものす」などの平安文学の慣用表現は逆に「今宇津保」の部分にし

か見られない、という。ついで、仲忠と母の山居のさまと公卿生活の叙述を比較して、「まるきり違つた「物語」を感ずる」といい、「かやうな物語性の対立が、語法や文体による区分と一致することは、私の「俊蔭の巻は『古宇津保』と『今宇津保』との合成なり」とする仮説を、さらに裏づけてくれる」という。⁶⁾

しかし、『松浦宮物語』のごとくに題材や語法・文体をあやつる擬古物語の例もあり、定型であればあるほど模倣や再生がしやすい。表現・文体などをもつて新旧を定めることは、そう簡単なことではない、とは容易に考えやすいことがらではあり、現に、その後、批判や修正意見が出されている。ただ、「批判や修正意見」といえて、『うつつほ物語』——俊蔭の巻だけではないのだが——物語が重層的な構造をなしており、複雑な構造自体が複雑な成立過程とからみあっているであろうことは、ほぼ共通の認識のもとにあるかと思われる。

その後、小西説を揚棄しようとするころみがあったことと、それに接した折のことと、上記のような物語の実体を考えるうえで重大な示唆を与えられることがあった。いささかわたくし事めいてはいるが、ここに取りあげておきたいと思う。

紫式部学会編『源氏物語とその周辺——古代文学論叢第二

輯―』が刊行されたのが一九七一年六月。稿者が学部 of 学生だったところだから、刊行後少しく時間をおいて購入したものだつたらう。巻頭に片桐洋一「伊勢物語根本——その虚構と方法」が置かれ、次いで野口元大の「交野の少将」と「うつほの俊蔭」が収められていた。そのあとには秋山虔・森一郎ほかの『源氏物語』論が並べられており、前期物語の論とはあきらかに一線を画していた。というのも、片桐のそれは持論に敷衍して、『伊勢物語』の成長のさまを論じたものであり、また野口論も、のちに自著におさめられた時に「俊蔭」の成立」と改題されたように、『うつほ物語』の成立過程論の意識で書かれたものであつた。⁷⁾期せずして両者ともに、「物語」が固定的な一回生起的な作者の営みによって成立するものではないことを説いていて、物語の生態をとらえるうえで象徴的な場面であつたのである。

野口は、天理図書館蔵・永仁七年書写本『源氏物語抄』の帚木の巻の注に、

かたの、少将

た、つくれる事也まゝとしからぬか
物をしるす也たとるへからず

此事、或仁云、うつほと申物語にあり。世にまれなる也。修明院の御本を昔申出て見侍き、と申。よくくたつぬへし。⁸⁾

とあるのをとらえて、「かたの少将」＝散逸物語『交野の少将』が、「うつほと申(す) 物語にあり」、つまり現存の『宇津保物語』の中に「交野の少将」があると云つてゐるのだと理解した。そして「うつほの中に「交野の少将」があるとは、いったいどういうことなのであろうか」と自問し、

現在に伝わるうつほ物語を検してみると、それが多くの先行の説話や物語を、自己を拡大するための材料として、ほとんど生のかたちで物語の組織内に取り入れていることは、衆目の一致するところであらう。従来も折あるごとにこのことは指摘され、論じられてきた。そうしてみると、この源氏物語抄にいうところも、「交野の少将」が、原形を見誤ることがないほどそのままの形で、うつほ物語を形成する一素材として用いられているという事実の指摘と解してよさそうである。

(野口、四六頁)

という解釈を示した。「此事」は「かたの、少将」だけを指しているのか、「たゞつくれる事也……」を含んでいるのか、「……物語にあり」とは具体的にどのような現象を指すのか、「修明院の御本」とは「かたの、少将」そのも

のだったのか、分明ならざるところは満載ではある——現に異論が出されている⁹⁾——が、「うつほと申物語にあり」を野口のように解釈できるとするならば、独立した作品であるはずの『交野の少将』物語が原形「そのままの形で、うつほ物語を形成する一素材として用いられている」と解釈しても無理ではない、ということになる。

そのうえで野口は、俊蔭の巻の後半、俊蔭女と若小君（藤原兼雅）の恋物語が『今昔物語集』『勸修寺縁起』の宮道弥益女と藤原高藤の物語と深い関係にあり、高藤の物語を『交野の少将』と同一作品と措定した場合、『源氏物語抄』の記述がその事実を指摘した資料として確認できる、ということになり、「うつほの中に『交野の少将』がある」という解釈と接合するわけである。

とすれば、俊蔭の巻が「古宇津保」と「今宇津保」の「合成」であるとすると小西甚一の説は、野村論のすぐそこに隣接することになる。

この巻の主要部が「古うつほ」、「今うつほ」と仮称される二つの物語の抱合・合体によって成立したものであるとする説は、はなはだ説得力に富み、魅力的なものであった。……従来から独立の先行作品たることがほぼ認められていた「古うつほ」はもちろん、「今う

つほ」も現在のうつほ物語作者の手によって創作されたものではなく、先行の独立物語に改修を加えた程度のものであって、部分的にはなおかなりよく原態をとどめていることを立証しえたかと思う。そして、この「今うつほ」こそ「交野の少将」だったのではないかと考えられるのである。（野口、七〇頁）

野口論の初出を読んだ当時、そして現在も『うつほ物語』の研究史には暗く、まったく門外漢で詳しくは知らないが、物語のなかに既存の物語が合成——つまり、嵌め込まれた、という指摘に、初出読了時には一驚したものである。「物語とはいったい何なんだ」と。

しかし、右の引用の直後の文に、

現在のわれわれの目からしては、こうしたことはきわめて異様な現象と映るのであるが、当時の物語制作の手法としては、案外珍らしいというほどのことではなかったようである。このような物語構成法は、それほど露骨ではないが、「交野の少将」自体も必ずしも無縁ではなかったと思われる節がある。……

（野口、承前七〇頁）

とある。『うつほ物語』を形成する部分 (Piece) のひとつが『交野の少将』であり、『交野の少将』もまた何らかのピースで出来上がっているとすれば、そのピースも……と、いくらでも入れ籠状態に物語が分節されていってしまう。無知だった、そしてそれとたいして変わらぬ現状の稿者にとつて、右のような指摘は、ただただ驚くしかなかったし、そうした指摘をうながす「物語」なるものは理解不能としかいようがなかったのである。

しかし、そうした「驚き」「理解」「無知」といったものは、現代の読者でしかいられない者、古代という時間軸を体現できぬ者であるがゆえのものであり、次々と証拠となる事実を突きつけられてゆけば、おのずと自己の愚昧を思い知らざるをえない。

四 「作り物語は、常に開かれてある」

右の野口論の数年後、一九七七年の春、刊行されたばかりの吉岡曠編『源氏物語を中心とした論攷』に収められた稲賀敬二「交野の少将」と「隠れ蓑の中将」は果して兄弟か——黒川本「光源氏物語抄」の資料を中心に⁽¹⁰⁾に接して、野口論と出会った時と似たような体験をさせられることになる。

稲賀は野口論を引きつつ、あらたにノートルダム清心女

子大学蔵黒川文庫本『光源氏物語抄』帚木の巻の注記に、

かたの、少将は、かくれみの、あに也。但かくれみの
は、中将の時にあらば、かくれみの、東宮亮といはれ
し人也。こまの、物語のはじめの巻也。かたの、少将
も中将の時の事なれども、物語のやう、みなかやうに
とりなしてかけり。かた野は、少将の時もありとみゆ
る所は侍也……

とあるのを発端として、論題に示されているふたつの散逸物語の主人公が、兄弟として設定してあり、それが「こまの、物語」＝散逸物語『狛野物語』の一部をなしていた、というのである。黒川本『光源氏物語抄』には右の後文に「其詞云」として長文の本文を引いており、稲賀はそれらの記すところにしたがって詳細な考証を展開してゆくのだが、結局は、

「交野」の兄と「隠れ蓑」の弟という人間関係及び、「交野」「隠れ蓑」「狛野」にその二人物がおのおのかかわっているという事は、確認できないまでも、可能性は存在するという事である。

という慎重な——少なくとも表現だけは——見解に抑制する。さらに、稲賀論は、この論の後文につづくごとく、『源氏物語』をめぐる「輝く日の宮」「巢守」などが「源氏物語の類」として「系列化」して享受されたのと軌を一にして、「交野」「隠れ蓑」「狛野」もまた「系列化」された作品群だった、と評価するところに真骨頂があったのかも知れない。

『うつほ物語』の場合にも「うつほの類」と把握する視点があつた（『枕草子』）ように、既存の『源氏物語』に向けて競争するかのような「輝く日の宮」「桜人」「巢守」の諸巻が創作された、とは稲賀のかねてからの持論である。そうした観点からすれば、「古うつほ」に「今うつほ」が組み込まれようと、「交野」「隠れ蓑」「狛野」が並立したり絡み合つたりしようとも、特段変わったことではない、ということにならう。そうした方法を許容するのが「物語」という形態であり、それを享受する環境であつた。

野口の論といい、稲賀の論といい、それまでの研究史と資料とその読解・考証に支えられているとはいへ、その奔放な発想には、凡人たる稿者のごときにはとうてい及びもつかぬものと敬意を表さざるをえない。しかし、現代の後秀は、こうした物語間のゆくたてを、「作り物語」と「作り物語」の関係として、ごく簡明にとらえてみせてくれる。

加藤昌嘉はこういう。

現存『うつほ物語』は、『源氏物語』に先行する、長篇の作り物語と称される。……実際のところは、複数の短篇が、連結と合流によつて、結果的に、塊に成つた」と捉えるべきものである。（加藤、二八頁）

作り物語と作り物語の連結は、『落窪物語』や『うつほ物語』だけで起つた特異現象ではない。散佚してしまつた作り物語の中にも、流動的に連結や合流をなしていたものが存在していたと窺知される。（同三〇頁）

作り物語の連結・合流は、『源氏物語』を以て終つてしまつたわけではない。『源氏物語』の流布後、平安時代後期～鎌倉～南北朝～室町時代になつても、そうした連結・合流はなされていたと見られる。

（同四〇頁）

——と。

これらは、もとより加藤の依拠・引用する先行研究なくしてはたどり着けぬ見解ではあろうし、その先行研究のい

くつかは本稿に引くところと一致してもいる。しかし、ここまで明晰な物言いだまじめあげる技量も端倪すべからざるものと言わねばならない。加藤は、物語というものについて、こうもいう。

作り物語には、著作権もなく、乗り入れ不可侵の独立性もなく、更新不可能の完結性もなかったろう。作り物語は、常に開かれてあり、作者・読者の営為によって、連鎖・編成をくり返していたろう。(同三九頁)

稿者が、歯切れわるく口ごもってもたまた長々と書き連ねている間に、俊秀は一瞬で抜き去ってゆく。

しかし、——しかし、である。稿者がいう「物語」とは「作り物語」と言い換えられるものなのだろうか、と自問してみると、答えは「否」である。

かつて、軍記や平安時代物語（加藤のいわゆる「作り物語」）の研究者たちが、自分の専攻専門という蛸壺に籠もつて、なかなか両方を縦断する視点を持つとうとしない状態であることを指摘したことがある。

中世の軍記と王朝物語を並列させれば、たしかに両者

の性格の相違は際立つことにはなるが、〈定型〉において両者が（限定的であるが）相対化されることもまた事実であろう。軍記のなかに前時代の残滓があるのではなく、両者は実は同心円の形をなしているに過ぎないのだ、と評価するところから『平家』の真価を見直すことに繋がるのではなからうか。⁽¹³⁾

ここにいう「定型」とは「話型」のことである。『平家物語』も「物語」である以上、「物語」に見出しうる話型は、厳然として保持されているのである。そこには「作り物語」だの「軍記」だのといたた殻に閉じ籠もっていると、自らの立脚点も見失ってしまうのではないかと憂えたものだ。物語は、和歌をとまなったり、戦びとの盛衰を描いたり、さまざまに変化してゆくが、物語が物語であるための、抜き差しできぬ底のものがあるはずなのだ。

しかし残念ながら、このような世界の片隅からのさやかな提言は、無視されて忘却のかたに去ったまま現在に至る。

いかに現象面を明晰に説かれようとも、現代人にとって「物語」はその全貌、本質、あるいは本義をとらえきれないことは可能なのだろうか。そして、それは理解可能なのだろうか。疑わしい、ということとは自縄自縛なのだろうか。

大方の現代人の鋭敏すぎる思考は、むしろ古代の物語に
対して鈍感すぎるような気がする。

(続)

注

- (1) 横井孝「後篇の物語の構造」(横井・久下裕利編『宇治十帖の新世界』知の遺産シリーズ5、武蔵野書院、二〇一八年三月刊、所収)。
- (2) 阿部秋生「結語」(『源氏物語研究序説 下』東京大学出版会、一九五九年四月刊、所収)、一〇三〇頁。
- (3) 『源氏物語』本文は、『源氏物語大成』校異篇の頁数を記す。
- (4) 成立論についての整理は、古くは阿部秋生編『語説一覽 源氏物語』(明治書院、一九七〇年八月刊)があるし、近くは加藤昌嘉・中川照将編『紫上系と玉鬘系——成立論のゆくえ』(勉誠出版、二〇一〇年六月刊)が主要な論考を再録し解説を加えている。後篇の物語については、横井前稿「後篇の物語の構造」が概観している。
- (5) 平井仁子「物語研究における年立の意義について——『源氏物語』の場合」(『中古文学』第三二号、一九七八年九月)、五六頁。
- (6) 小西甚一「俊蔭卷私見」(『国語国文』第二三卷一、一九五四年一月)。のちに続編「古字津保と今字津保」(『言語と文芸』第二号、一九六〇年七月)、さらに『日本文藝史Ⅱ』(講談社、一九八五年一〇月刊)三五〇頁以下に再説されている。
- (7) 野口元大「交野の少将」と「うつつほの俊蔭」(紫式部学会編『源氏物語とその周辺——古代文学論叢第二輯——』武蔵野書院、一九七一年六月刊、所収)。のち、『うつつほ物語の研究』(笠間書院、一九七六年三月刊)に「俊蔭」の成立」と改題、改編して所収。ここでは初出のかたちで引用し、「野口、××頁」のごとく記事の所在を明記する。
- (8) 松田武夫「源氏物語抄(国宝) 解題並に本文」(『和歌と新資料』越後屋書店、一九四三年四月刊、所収)による。
- (9) 藤村潔「源氏物語に見る原拠のある構想とその実態」(一九七二年一月初出、『古代物語研究序説』笠間書院、一九七七年六月刊、所収)。
- (10) 稲賀敬二「交野の少将」と「隠れ蓑の中将」は果して兄弟か——黒川本「光源氏物語抄」の資料を中心に(吉岡曠編『源氏物語を中心とした論攷』笠間書院、一九七七年三月刊、所収)。のち稲賀「源氏物語の研究——物語流通機構論」(笠間書院、一九九三年七月刊)所収。
- (11) 正宗敦夫収集善本叢書『光源氏物語抄』(武蔵野書院、

二〇一〇年二月刊)による。

(12) 加藤昌嘉「作り物語と作り物語」(初出二〇〇四年三月、
『源氏物語』前後左右) 勉誠出版、二〇一四年六月刊、
所収)。

(13) 横井孝①「軍記物語と物語文学」(『国文学解釈と鑑賞』
第五二卷二三号、一九八八年二月)、②「物語から平家
物語へ——その序説」(『静岡大学教育学部研究報告(人
文・社会科学篇)』第四三号、一九九三年三月)、③「康頼・
成経帰京における異郷譚と「三年」の柁」(『延慶本平家
物語考証2』(新典社、一九九三年五月刊、所収)など。
ここは②稿から引いた。

(よこい たかし・実践女子大学教授)